

Drafted pattern と Commercial pattern の 比較研究 (第5報)

ブラウスにおけるC. P. の体型別適合度

古川 智恵子・加藤 恵子
後藤 喜恵・松井 章子

Comparative Study of Drafted pattern and Commercial pattern (Part 5)

Fitness of Commercial patterns
by the Type of Body in Case of Blouse

by

C. FURUKAWA, K. KATŌ
Y. GOTŌ, and A. MATSUI

緒 言

前報までに、下半身の体型分類および各体型別に、適合度の高いスカート・パターンの、手がかりを得るための比較実験を試みたが、今回は続いて上半身に着用する Commercial pattern ブラウスの適合性についての知見を得るため、上半身の体型分類をし、検討したので報告する。

実 験 方 法

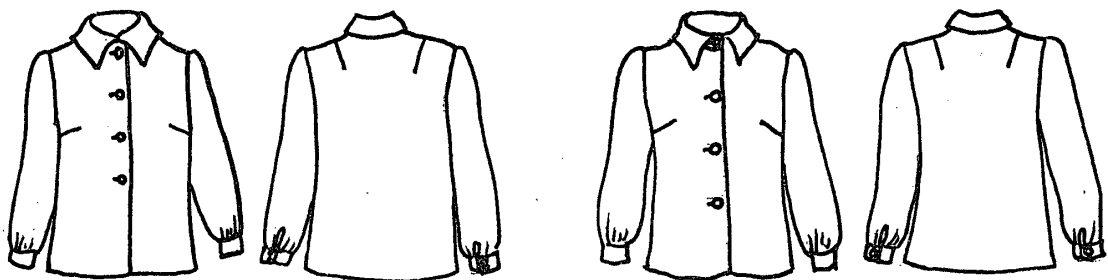
実験方法は表1の内容について行なった。Commercial pattern (以下 C. P. と略す) ブラウスの各社デザインは図1の通りである。

表1

項 目	
調 査 年 月 日	48年12月～49年1月
調 査 対 象	本学学生 180名
測 定 方 法	テープメジャー法
実 験 材 料 名	C. P. ブラウス 4社

J 社

K 社



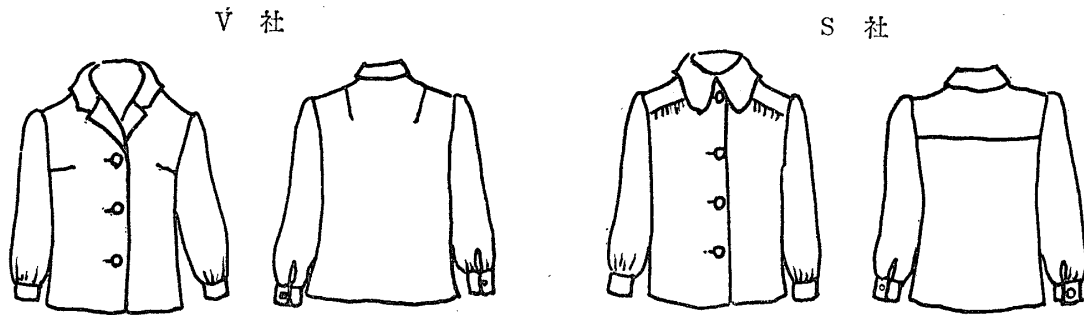


図1 C. P. ブラウスデザイン

結果および考察

I 体型分類

図2に示すように被験者の体型分類をした。第3報と同様に柳沢氏らの体型分類法による上半身の体型分類を背肩幅と胸囲の2項目組合せによって図内のワクにあてはめてみた。中央太線ワク内が胸囲と背肩幅の均整のとれた体型で、これをA体型とした。左下太線ワク内は、胸囲に対して背肩幅の狭い体型で、これをB体型とし、胸囲に対して背肩幅の広い体型をC体型とした。これら三つのワク外の者は、AとBの間をAB体型、AとCの間をAC体型、Bよりさらに肩幅小の体型、す

		背 肩 幅								
		33	34	35	36	37	38	39	40	41
胸	73		1							
	74				1					
	75			1						
	76					1				
	77			2	2	1				
	78			2	5	2				
	79			2	4	2	4			1
	80	1	1	5	9	14	12	3		
	81				2	2	2	3		
	82		1	4	1	7	5	4		
83				4	3	6	2		2	
胸	84			1	2	3	2	3	1	
	85					8	3	5	3	
	86				1	1	6	2		
	87				1		1			
	88					1	1	1		1
胸	89				1		1	1		
	90				1	3	1	1		
	91						3	1		
	92							1		
	93									
	94									
	95									
	96									
	97									1

図2 体型分類

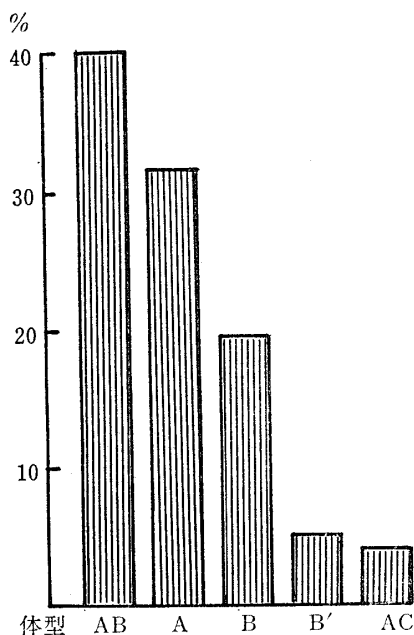


図3 体型分布

なわち図に示す左ワク外の者をB'体型とした。以上の体型分類法により、本学学生の被験者の体型分布は図3に示すように、AB体型が40.0%で最も高率で、次いでA体型の31.7%である。AとAB体型を合わせて71%以上となり、被験者の7割が、バランスのとれた正常体型、またはそれに近い体型といえる。次にB体型19.4%、B'体型5%、AC体型3.9%の順となり、C

体型はわずか1名であった。

II 体型別測定値

被験者の各体型別に平均および標準偏差を求めた結果表2のようである。背肩幅は第7頸椎点を通る左右の肩峰点までの寸法を計測した結果、平均ではB体型が最も狭く、広いのはAC体型である。標準偏差ではA体型が小さく、B'体型では大の傾向がみられた。胸囲は乳頭囲胸囲を水平に計った結果、平均ではAC体型が最小、B'体型が最大、標準偏差ではA体型が2.42cmと最小、B'体型が4.50cmとその差は約2倍みられた。頸付根囲は第7頸椎点・鎖骨内側上縁を通る位置を計測した結果、平均ではA体型が最小、B体型が最大、標準偏差ではAC体型が最小、B'体型が最大であった。背丈は第7頸椎点から胴囲線までを計測した結果、平均ではAB体型が最も短く、B'体型が最も長い。その差が頸付根囲と同じく各体型とも差はほとんどみられなかった。標準偏差ではAB、AC体型が少なく、A体型が最もその差がみられた。袖丈では肩峰点から手くび線までを計測した結果、平均ではB'体型が最も短く、AC体型が最も長い。標準偏差ではAC体型が最も小さく、A体型が最も差がみられた。1966年工業技術院資料（以下工技院資料と略す）の20歳女性と被験者の5体型の平均と比較すると背肩幅は-1.78cm、頸付根囲は-0.13cmと工技院資料より小さくみられた。袖丈では被験者は平均52cm以上を占めるが、工技院資料では49.79cmであった。以上の結果被験者は背肩幅は狭く、胸囲は大きく、袖丈は長く、頸付根囲、背丈は余り差がみられなかった。

表2 体型測定値 単位cm

部位	体型	A	B	AB	AC	B'	1966年 工技院 資料
		背肩幅	\bar{x}	37.56	36.41	37.07	38.07
	S	0.71	1.36	1.24	1.11	1.81	1.98
胸囲	\bar{x}	80.46	84.68	82.28	78.43	88.89	81.75
	S	2.42	3.24	2.79	3.25	4.50	4.50
頸付根囲	\bar{x}	36.86	37.17	36.54	37.14	37.11	37.09
	S	1.64	2.09	1.69	1.55	2.13	1.51
背丈	\bar{x}	38.19	38.17	37.96	38.14	38.33	37.62
	S	3.65	1.83	1.96	1.96	2.05	1.72
袖丈	\bar{x}	52.18	52.37	52.78	53.43	51.55	49.79
	S	2.27	1.66	2.17	1.50	2.26	2.30

その差が頸付根囲と同じく各体型とも差はほとんどみられなかった。標準偏差ではAB、AC体型が少なく、A体型が最もその差がみられた。袖丈では肩峰点から手くび線までを計測した結果、平均ではB'体型が最も短く、AC体型が最も長い。標準偏差ではAC体型が最も小さく、A体型が最も差がみられた。1966年工業技術院資料（以下工技院資料と略す）の20歳女性と被験者の5体型の平均と比較すると背肩幅は-1.78cm、頸付根囲は-0.13cmと工技院資料より小さくみられた。袖丈では被験者は平均52cm以上を占めるが、工技院資料では49.79cmであった。以上の結果被験者は背肩幅は狭く、胸囲は大きく、袖丈は長く、頸付根囲、背丈は余り差がみられなかった。

III BustのPattern別Size別比較

今回の実験に使用した各パターンをサイズ別に実測した結果表3のようである。表示方法についてみると、JではBust sizeが標準80cmで設定され、70~98cmまでの範囲である。Kは7、

表3 BustのPattern別Size比較 単位cm

パターン名		表示size/Bust size				Bustのゆりみ
		標準/80				
J	前後	21.0 21.0	21.5 21.5	22.0 22.0	22.5	6 差なし
		7/80	9/83	11/86	13/89	6 後1.5広
K	前後	20.8 22.2	21.5 23.0	22.2 23.8	23.0 24.5	6 後1.5広
		小/79	中/83	中大/87	大/91	13 前2.0広
V	前後	24.0 22.0	25.0 23.0	26.0 24.0	27.0 25.0	13 前2.0広
		S/79	M/82	ML/85	L/90	9 前1.5広
S	前後	22.7 21.3	23.5 22.0	24.3 22.7	25.5 24.0	9 前1.5広

9, 11, 13の奇数 size に分かれ, Vは小, 中, 中大, 大, SはS, M, ML, Lで表わされている。表示 size と Bust 寸法間のパターン段階差をみると, K, Sは3cm差, Vは4cm差でとられている。Bust のゆるみはパターンの Bust 実測 size から表示 size を減じた結果, J, Kは6cm, Vは13cm, Sは9cmであった。パターン実測 size の Bust 幅の前後差を計測した結果, S, Vは前が広く, Kは後が広くJは前後差がみられなかった。以上の結果いずれ

表4 体型別パターン別補正有無 (人)

体型	補正有無	パターン				計	
		J	K	V	S		
A	なし	16	3	2	1	9	15
	あり		13	19	3	7	42
B	なし	10	2	2		9	13
	あり		8	8	2	3	21
AB	なし	25	3	8			11
	あり		22	22	9	8	61
AC	なし	5	2				2
	あり		3		2		5
B'	なし	1		5		3	9
	あり		1	5		3	9
計	なし	57	10	12	1	18	41
	あり		47	54	17	21	139

のパターンにおいても同一表示, 同一サイズは認められず, Bust のゆるみにおいても各社まちまちであった。

IV 体型別, パターン別補正の有無 および部位

前に述べたパターンを使用して, 被験者各自が縫い合わせたブラウスを着用し, 適合性を観察し, 補正を行なった結果, 表4に示すように, どの体型, どのパターンにおいても, 補正の箇所, 度合いの多少はあるが, 補正を要した者が圧倒的に多く, 総人数の77%となっている。これらの補正箇所を部位別にみると, 表5に示した通りであるが, 各社パターン使用人数にばらつきがあるため, ここではパターン別に比較する

表5 補正部位 I

体型	部位	パターン																																								
		肩幅				後肩線				前肩線				背丈たむ				ダーツ				N・L				袖				A・H				脇線				丈				
		J	K	V	S	J	K	V	S	J	K	V	S	J	K	V	S	J	K	V	S	J	K	V	S	J	K	V	S	J	K	V	S	J	K	V	S					
A	人	4	6	2	2	1	9	1	5	3	7	2	8	5				2	1			1	4	3	2	4	18	2	3	6	3	5	2	6	18	2	6	1	2		1	
	%	2.7				3.0				3.8				0.9				0.5				1.5				12.3				2.6				9.9				0.7				
B	人	2	2		5	1	2	1	2	3	3	1	3	5								1		3	9	4	3	4	2	2	2	2	8	9	3	7					2	2
	%	1.7				1.1				1.9				0.9								0.8				3.6				1.1				5.1				0.7				
AB	人	7	4	4	1	4	9	0	1	5	11			5	1		1					5		4	2	0	18	2	1	3	16	2	2	1	27	1	4				3	
	%	3.0				2.7				3.0				1.5								1.7				10.0				3.9				10.0				0.5				
AC	人	1				1	1			1	1			2												1	2			2			5									
	%	0.1				0.3				0.3				0.3												0.5				0.3				0.9								
B'	人		1		1		1				2				1	1			1							2	1	2		1	2	3	5	1			1				1	
	%	0.3				0.1				0.3				0.3				0.1								0.9				0.5				1.7				0.1				
総計	人	43				39				50				21				4				21				145				46				146				12				
	%	8.1				7.4				9.5				3.9				0.7				3.9				27.5				8.7				27.7				2.3				

ことをさげ、各体型全体を通した観点から、その部位別補正の度合いを図4で示すと、最も高率を占めたのは脇線で全体の27.7%，次いで袖27.5%，前肩線9.5%，A・H8.7%，肩幅8.1%以下後肩線，背丈等の順であり，脇線と袖に半数以上の補正が見られた。

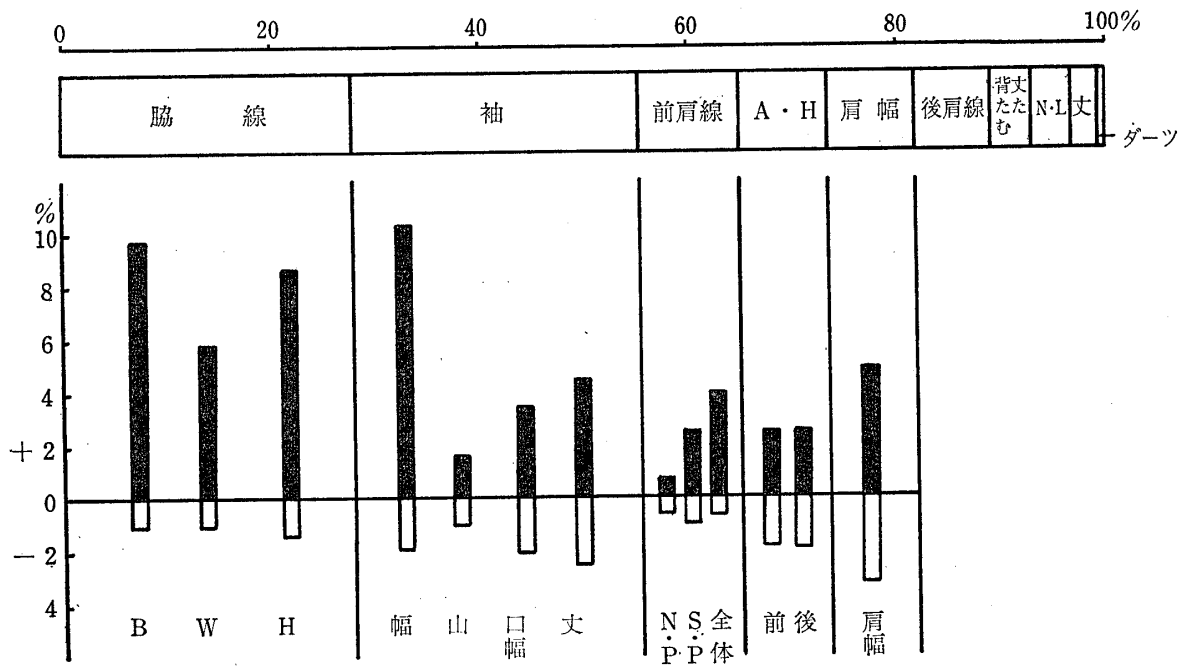


図4 補正部位 II

さらにこれらの補正部位について、各部位別に、パターンの出来上がり線を0として寸法の出し入れを、+、-とした補正率をみると、どの位置においても+の側に大であり、-の側ではわずかずつであった。

脇線27.7%のうち、その大半は+であり、なかでも Bust の9.7%が高率であり、Hip 8.6%，Waist 5.8%の順であった。これは表3で示した通り、各社 C.P.における Bust size のゆるみがまちまちであり、J, Kのゆるみ6cmのパターンを使用した者が多く含まれているためと考える。また Hip においても同様な理由でゆるみが不足しているものとする。

Waist では、ブラウス作製の場合、アンダーにするか、またオーバーブラウスとして着用するかにより、シェーブの仕方が違い、体型に合わせるより、Bust, Hip の補正点から、自然のつながりの表現による補正であると考えられ、低率になったものと思われる。

一は Bust, Waist でともに1.1%，Hip においては1.4%の出現で低率であった。

次いで補正の出現率の高い袖については、これも脇線と同様、全体に+の側にみられ、最も高率を示したのは袖幅であった。

これは、Bust のゆるみ不足による脇線の補正と対応があるためと、またややその率が高く10.3%みられたのは、袖山のいせこみ分量が不足していたためと考えられる。次いで袖丈の4.5%，袖口幅，袖山の順であった。袖丈，袖口幅については、カフス付き袖口であるため、ギャザー分量，またはタック分量，ふくらみの程度などにも各自の好み加わるため、-の側にも多く出現したものと思われる。

次に洋服構成における重要ポイントである肩部に高率を示したのは、これは衣服を支える大切な部位であり、その洋服の着やすさ，着にくさを最も感じさせる部位であるためと思われる。

前肩線においては 9.5%のうち、いずれも+の側に多くみられ、部位的には肩線全体を+したものの 4.0%、S.P.寄りでは2.6%、N.P. 寄りにもわずかにみられた。これは、パターンの対象としている体型に比べ、肩の厚みのある学生が多かったためと思われる。

A・Hについては、前後とも、+に大であったが、これは Bust size の増加に従い、胸幅、背幅もともに大きくなるため、この補正の現われがうかがわれる。

以上学生には、パターンの表示サイズに従い、最も体型に近い Size を選ばせたが、各社が対象としている体型に比し、本学学生は胸囲、肩の厚みが大であり、体格の良さを示している。

このことから、C.P.を扱う場合、どこを第1眼目として考えるかについては、各C.P.の Bust size のゆりみが本学学生においては不足のため、特に自己サイズとパターンサイズとを十分に確認し、パターンを扱う時点でグレーディングをすることが大切であると考えられる。それに対応して、アームホールのサイズ測定もともに重要であり、袖幅の設定をその測定から割り出す必要があると考える。

以上のことから、大半の補正はこのサイズ確認をすることによって、少なくなるものと確信される。

V Pattern 適合度の検定

パターン使用の場合、表4に示された補正有無率から、体型別適合度の検定をした結果を表6によって示すように、補正有無率による χ^2 検定では、A体型、B体型についての適合度は5%の危険率で有意差が認められ、AB、およびAC体型においては差は認められなかった。

各パターン別に補正有率から不良率を求めると、数値大のものは不良率が大であり、A体型においては、K、J、V、Sの順であった。B体型ではVが最も不良率大であり、JとKは同率を示し、Sは最も不良率小であった。AB、AC体型においては順位はつけられなかった。

この結果、A体型においては、Sパターンが最もよく適合し、次いでV、J、Kの順であった。B体型においてもSパターンがよく適合し、JとK、Vの順であった。

以上の結果から、この実験時点においては、C.P.を選択する場合、最も適合しやすいのはSパターンであったが、今後これを基本ブラウスのパターンとして、デザインを応用転移させ、使用することが望ましいと考える。

表6 適合度の検定

検 定 体 型	χ^2	$\chi^2(3,0.05)$	$\chi^2(1,0.05)$	不良率(%)			
				J	K	V	S
A	10.92*	7.81		81	90	75	43
B	10.88*	7.81		80	80	100	25
AB	6.26	7.81					
AC	1.22		3.84				

A……S<V<J<K
 B……S<J、K<V
 AB……有意差なし
 AC……〃

要 約

以上C.P.のブラウスについての実験結果をまとめると、

1. 被験者 180名の胸囲、背肩幅の2項目組合わせによる体型分類では、AB体型が最も高率を占め、次いでA体型が多く、5体型の分類がみられ、バランスのとれた体型が70%を占め

た。

2. 被験者の測定項目を1966年工技院資料の20歳女性平均と比較すると、胸囲、袖丈、背丈においては、本学学生が大、背肩幅においては小の傾向を示し、頸付根囲ではほぼ同寸法とみられた。

3. C.P.ブラウス表示サイズには、統一性がなく、同一サイズ、同一表示方法がみられず、またバスのゆるみにおいても、各社まちまちで構成されていた。

4. 各体型共通の補正部位は、脇線、および袖で、次いで前後肩線にみられたが、そのいずれもが表示サイズよりプラスの側にみられ、各社パターンの対象としている体型に比し、本学学生が胸囲、肩の厚み等のサイズが大の傾向を示していた。

5. 補正有無率による体型別適合度の検定結果では、A、およびB体型では、5%の危険率で有意差がみられ、AB、およびAC体型においては有意差はみられなかった。

パターン別に補正有率から不良率を求めた結果、A体型では、Sパターンが最も適合度大で、次いでV、J、Kの順で、B体型においても、Sパターンがよく適合し、JとKが同率で、次いでVの順にみられた。

今回の実験で得た資料を基礎に、パターンに対するすぐれた選択眼をもち、製作時においては、バスのゆるみの自己サイズとパターンサイズを十分に計測確認し、パターンの特徴と、パターン補正の要領を知ることにより、適切に処理すれば製作過程における大半の補正はなくなり、すぐれた機能性と着ごこちよい洋服の構成が可能になろう。

このように、構成実習を限られた時間内で、より効果的な能率指導へと進めてゆきたいものである。

参 考 文 献

- 柳沢澄子他：家政学講座被服構成学12 p.62~106 光生館（1971）
柳沢澄子他：日本人の体格調査報告書 p.98 日本規格協会（1970）